人とかかわり，表現することで気付きの質を高める生活科

横瀬　文子

低学年の子どもたちは，自分を客観的に見ることが難しい時期である。そんな時期に，自分たちを守ってくれているあたたかい町の人とかかわることで，他者を思う人の気持ちに繋がることができる。そうしたことをrealに表現することで，より気付きの質が高まっていくだろう。

１学期には，公園での人との出会い，２学期には，「あったかみつけ」の調査を通して，子ども１１０番「きしゅうくんの家」をはじめ，様々な「あったかいもの」との出合いがあった。

本実践は，公園やきしゅうくんの家などの地域の人と関わって気付いたことを，表現する活動を通して，地域を知る楽しさが分かり，新たな気付きが生まれたり，改めて気付いたことを再認識したりすることができるのではないかという仮説のもと取り組んだ。

キーワード：町たんけん，地域とのかかわり，表現活動，　きしゅうくんの家，長町公園

１．研究目的

本学級の子どもたちは，通学地域が広範囲に渡っているため，公立小学校よりも地域とのつながりが薄いことに注目した。

自分の住む地域に学友が居れば，下校後，近くの公園で遊んだり，近所のお店で買い物をしたりと，地域の場所や人とつながりがもちやすい。

しかし，その機会が少ない本学級子どもたちにとって，それは難しい。そこで，学校周辺の公園や商店，民家などを訪れ，地域の人と出会い，興味をもつことで，人と繋がる楽しさや，安心感を得ることができるのではないかと考えた。また，自分の地域についても人との出会いや公共施設の様子などに興味をもつことができることを期待している。

２．研究方法

実践①「行くぞ！２Ｂたんていだん　学校の周りをたんけんだ」

実践②「あったかい！あんしん！自分の町」

２．１．主張点

実践①では，「『２Ｂたんていだん』として，地域の公園や商店を調査し，自分なりの表現方法を選んで伝え合うことで，新たな気付きがあったり，自分の気付きを見つめ直したりすることができ，地域を知ることの楽しさを感じることができる」である。

実践②では，「それぞれの『あったかみつけ』について，表現物を使って交流することで，自分が知らなかった視点に気付いたり，自分の視点を再認識したりすることができるであろう」である。

２．２．教科提案とのかかわり

生活科部では，「五感を通して感じ，表現することで気付きの質を高める生活科～real な活動を通して，認識力の土台を育みながら～」を教科の目標としている。研究の展望として５つの柱を挙げている中でも，本実践では，「①リアルな体験，学習と生活の結合※real　」「③人とかかわる活動※relation」「④表現活動の充実※representation」「⑤異質性を認め合う※respect」を提案するものである。

２．３．学校提案とのかかわり

本年度の学校提案「問い続け，学び続ける子どもたち～子どもの言葉でつくる授業～」を受け，生活科部では，子どもたちが表現活動を通して気付きの質を高める学びを研究の柱にした。

実践①②を通して，自分とかかわりがあるひと・もの・ことに出合うことで，様々なことに気付き，気付いたことを友だちと交流する中でもっと知りたいことが増える。本校周辺で「あったかみつけ」の町たんけんをすると「どうしたら，みんなに分かりやすくあったかみつけを伝えられるのだろう」「学校の周りと自分の町は違うのかな」と問いをもち，より学ぶ意欲に繋がっていくことだろう。

また，表現物を作ったり，発表したりする過程で，「きしゅうくんの家って，こんなところにもあったんだ」「友だちの発表を聞くと，知らなかったことを知ることができて楽しい」「発表してみると，まだわからないところがあるから，もっと調べていきたいな」などのような感想や気付きをもつことができるだろう。そして，子どもたちの問いや学びから授業を進めていくことにより，「問い続け，学び続ける子どもたち」が実現していくのではないかと考える。

３．単元の実際

３．１．単元の流れ

実践①「行くぞ！２Ｂたんていだん　学校の周りをたんけんだ」

第１次．たんけんに出かけよう
- 岡公園をたんけんだ（３）
- 長町公園をたんけんだ（２）
- 知りたいことを出し合おう（１）

第２次．くわしく調べよう
- 長町公園へ２Ｂたんていだん出動（３）
- 調査報告の準備をしよう（２）
- 調査結果を報告しよう（３・・・本時２／３）

第３次．もっと町のことを伝えよう
- ２Ｂたんていだん再出動（３）
- 調査報告の準備をしよう（２）
- 調査結果を報告しよう（３）
- 町の人とつながろう（２）

実践②「あったかい！あんしん！自分の町」

第１次．あったかみつけの旅に出発しよう
- あったかいとは何だろう（１）
- 校内で「あったかみつけ」をし，気付きを交流しよう（１）
- 学校周辺で「あったかみつけ」をし，気付きを交流しよう（３）

第２次．あったかみつけを広げよう
- 自分の町の「あったかみつけ」をし，気付きを交流しよう（２）
- 「きしゅうくんの家」の人を予想しよう（１）
- 「きしゅうくんの家」の人に会い，気付きを交流しよう（４）
- 今までの「あったかみつけ」をまとめ，次時の見通しをもとう（１）

第３次．あったかみつけを伝えよう
- 伝えたいことを考えよう（１）
- 伝えたいことを整理しよう（３）
- 伝えたいことを出し合おう（３・・・本時２／３）
- 伝える準備をしよう（２＋a）
- 「あったかみつけ」をつたえよう（１）

３．２．活動の実際

教科提案で紹介した，研究の展望である柱を主に，活動を振り返る。

３．２．１．リアルな体験，学習と生活の結合　real

クラス目標である「あったかい」をスタートに取り組んだ実践②では，町たんけんを通して，様々な「あったかい」が見つかった。その中で，みかが，「きしゅうくんの家は，みんなを守ってくれるから，あったかいと思います」と言った。しかし，りかは，「きしゅうくんは，キャラクターだから，あったかくないよ」そうたは，「きしゅうくんって犬じゃないの」と言い，「きしゅうくんの家」とはどんなところなのかという問いが生まれた。このことから，きしゅうくんの家の調査が始まった。

学校近辺の「きしゅうくんの家」（図１）への訪問では，そこに住む人とリアルにかかわることができ，「きしゅうくんの家」を知らなかった子たちにとって，「きしゅうくんの家は，自分たちを守ってくれる」「困った時に守ってくれる大人がいる」「きしゅうくんの家があると，安心して登下校できる」ということに気付くことができた。また，調査を進める中で，「ぼくの家の近くにもあったよ」「学校来る途中に３軒見つけたよ」など，自分の生活と繋がる発見もあった。

３．２．２．人とかかわる活動　relation

実践②の「きしゅうくんの家」の人と出会ったときには，きしゅうくんの家についての話から，その人

図１　「きしゅうくんの家」の人との出会い

の人柄まで様々に聞くことができた。「いつでもこまったときは，かけこんでおいで」「助けを求めてきた人はいないけど，人の役に立ちたいと思ってやっているよ」「みんなが登校しているころに，セブンイレブンの前で，黄色い旗を持って立っているよ」という話をしてもらい，子どもたちはきしゅうくんの家の人が自分たちのことを守ってくれていることの実感を得た。

また，実践①で長町公園を調査したときに，公園で出会ったおばあさんと一緒に四葉のクローバー探しをした。その後，四葉のしおりをもらい，驚き，喜びの気持ちを感謝の手紙にした。子どもたちがお返しに，手紙をわたしに行くと，後日，おばあさんが学校を訪問して朝捕まえたせみをプレゼントしてくれた。（図２）

このように，人とのかかわりによって，その人たちの生き方や，人とかかわることの喜びを感じることができた。

図２　公園で出会ったおばあさんの来校

３．２．３．表現活動の充実representation

子どもたちが出合ったことや気付いたことを，伝えたいことのチームに分かれ，発表会を行った。紙芝居・ペープサート・ポスターなど，自分たちで表現するものを考えて作成した。(図３)

実践②では，以下のチームに分かれた。

○きしゅうくんのキャラクターチーム･･･ポスター･劇
○きしゅうくんの家チーム･･･劇・紙芝居・クイズ
○きしゅくんの家の場所チーム･･･絵
○町の人チーム･･･絵・工作
○自動ドアチーム･･･ペープサート・ポスター
○足長募金チーム･･･紙芝居・募金箱の模型
○赤いランプチーム･･･クイズ・楽器・絵

様々な表現が出てきた。表現をする中で，しっかり調べていたつもりが，伝えられないという調査不足に気付いたり，より良くわかる表現方法を見つけた。このことから，再度調査に出かけるなど，調べることへの意欲に繋がった。

図３　表現物をつかって

３．２．４．異質性を認め合う　respect

実践①では，地域の方々からペタンクを教えてもらったり，四葉のクローバーの見つけ方を教えてもらったりした。(図４) このように，人と繋がる (relation) ことで，相手を尊ぶことができた。

また，発表を通して，「さきちゃんの紙芝居，分かりやすかったね」「たかしくんの劇，分かりやすくておもしろいね」など，友だちの作った表現物の工夫や方法を認め合ったり，もっとこうしたらいいよと高め合ったりすることで，respect することに繋がった。

図４　地域の人から教えてもらう姿

４．単元の考察

リアルな体験を通して，子どもたちは意欲的に学習に取り組むことができた。また，その中で，人との交流を通して，人とかかわることの楽しさや，人から聞いて知ることのよろこびに気付いた。実践①では，ペタンクを調べたけいたが，「ペタンクの人たちにペタンクのやりかたをわかりやすくおしえてもらってやりかたがわかりました。ぼくは，大人になってペタンクをしたいなと思いました」と振り返った。このように，人とのかかわりから，相手への憧れ (respect) をもつことができたのではないかと考える。

また，表現活動をしていく中で，友だちに伝えることの楽しさや難しさを知ることができた。表現しているときの子どもたちの工夫は面白く，実践②では，きしゅうくんのキャラクターチームがきしゅうくんの家チームの劇を見て，その表現の楽しさに惹かれ，劇を取り入れるなど，楽しさを感じていた。しかし，分かりやすい発表にするために，「『あったかみつけ』が伝わる発表になっているか，確かめよう」というねらいで，交流の時間をとったが，伝える側は，自分の作った表現に対する自信があり，聞く側は，自分の表現に生かしたいという思いが強く，伝える側・聞く側の視点にズレが生じた。そのために，授業のねらいから外れたところに子どもたちの視点がうつってしまうという場面もあった。子どもたちの表現は，自分本位なものになりがちであるため，先生の適切な手立てが必要であったと考える。

５．成果と課題

成果として，２点挙げられる。

１点目は，人とたくさんかかわることで，子どもたちは，人とのかかわりを楽しむことができた。特に実践②では，なつこは，「帰り道のきしゅうくんの家見つ

けたよ！先生も一緒に見に行こう！」と自分の通学路を友だちと案内してくれた。(図５) その中で，自分の町のきしゅうくんの家の人とかかわり，話をすることができた。こうしたところから，人とかかわることの楽しさや，自分の地域とのつながりが生まれた。

図５　自分の町のきしゅうくんの家の人と交流

２点目は，表現して伝える楽しさや，聞く楽しさを感じることができた。実践①では，表現して作った工作のペタンクをみんなですることで，表現したものをみんなで共有する楽しさや，それを聞いたりやってみたりする楽しさを感じることができた。(図６) ともおはペタンクの発表の後，ペタンクチームに，「休憩時間にもあそんでいい？」と聞いていた。

図６　表現物をみんなで楽しむ

課題としては，３点挙げられる。

１点目は，課題設定である。「きしゅうくんの家」は，子どもたちの身の回りにあるものであったため，興味をもつことができた。しかし，それに限定することで，町の安全・安心に繋がるであろうものを限定してしまった。実際，子どもたちは「きしゅうくんの家」以外のものからも多くのものを見つけることができた。教材の幅をもう少し広げておくことで，より子どもたちが気付きの質を高められたのではないかと考えた。

２点目は，発表をする環境の設定である。子どもたちが発表する場が狭すぎたため，見ている人が発表を理解しづらかった。劇や紙芝居など，子どもたちの表現したいことに即した場や提示の仕方を先生が保障していくべきであった。

３点目は，視点の共有化である。子どもたちが「『あったかみつけ』が伝わる発表になっているか確かめよう」というねらいのもと，表現し，おたずねや感想を言い合った。以下はその時の場面である。

実践②自動ドアチームの発表場面
はるこ「(表現したテープサートを指して) 自動ドアの天井らへんにあるのは，監視カメラですか」
はるみ「監視カメラじゃなくてセンサー!」
あきお「なんで，自動ドアやのにオレンジと青があるの」
はるみ「それは，デザイン！」
先生　「本当はどうなの」
はるみ「透明です」

はるみは，自動ドアチームとして，表現物に自信をもっていたため，このような反応をしているように感じる。しかし，おたずねしたはるこやあきおは，町の人に伝わるかどうかを，real な目で質問しているのに対し，はるみはその言葉を受け止めきれていない。お互いがねらいを継続して意識できるように，先生の働きかけが必要であったと考える。

以上の課題を踏まえ，今後も表現を通して，気付きの質を高める生活科を目指していくために，発表の場を保障したり，表現を更に工夫しようと思える交流会の持ち方を考えたりし，研究していきたい。

参考文献

池野悟(2010)「生活科実践事例集」小学館
鹿毛雅治・清水一豊(2009)「平成20年版小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり　生活　」東洋館
和歌山大学教育学部附属小学校紀要　第38集(2015)
文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説　生活編」